

和書門	
五三二〇八	類
一三二	函
一三二	架
八	冊

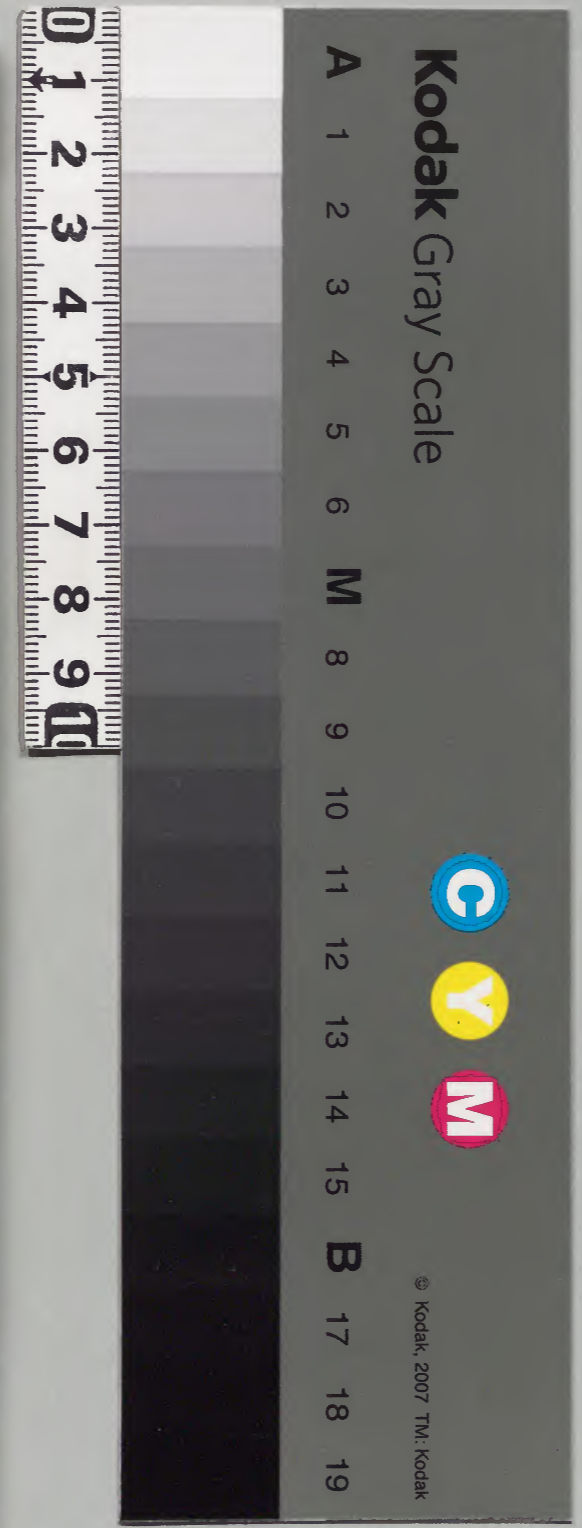
宣胤卿記

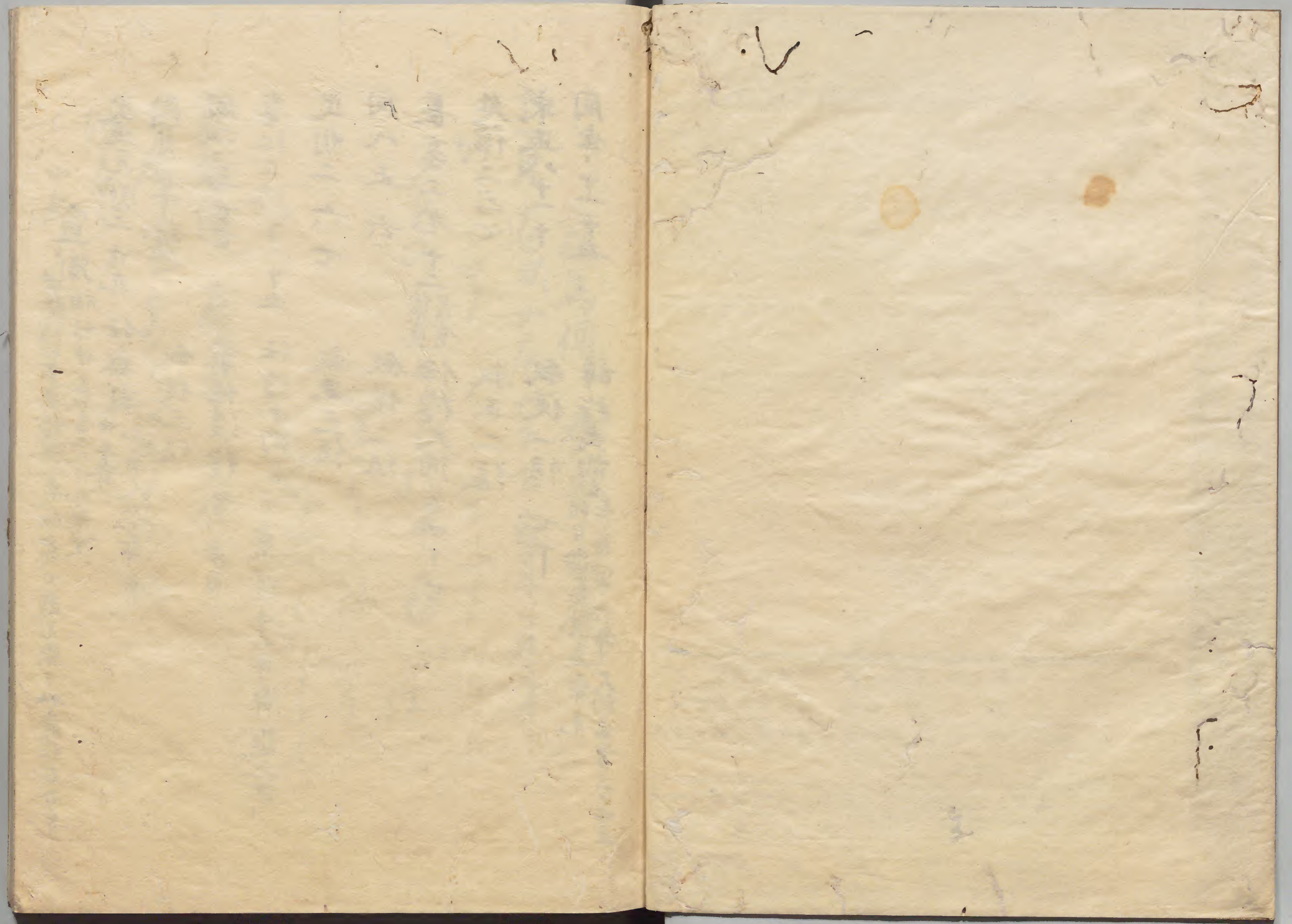
共七冊

庫文閣内		
五三二〇八	類	和書
一三二	函	
一三二	架	
八	冊	

一條殿再任自明應  
育七兩度多武峯  
所破裂表事有之

内閣文庫	
番號	和 53208
冊數	8 ( 3 )
函號	162 244





宣胤

系議以弟傳給失二歳叙爵七歳元服十五歳任右少弁

文正元成三十九

任察議

廿九歳元藏人元中弁

同月日可勘之

叙従三位

同二三廿七

兼信濃守

除目

應仁二戊子十五

任控中納言

廿七歳陽中一年昇進之例

文明二六七

叙正三位

同八正六

叙従二位

長享二九十二

任信

任控大納言四十七

延徳二三七

叙正二位

永正八十二十

叙従一位七十

同享十二十五

辞指大納言

同日出家法名宗光在官早六年大納言二十四年

貞馬傳

奏事 明應二

十二月十七日女房在出立申上申事

のしこまりしるふ事

くものしるふ事

しるふ事

しるふ事

貞馬傳

奏事 宣下

用脚申上りし事

は

しるふ事

飯尾加賀守殿

以使者指申を返申云今度事  
世真言の暇折同役系以万相觸  
細川右京右史千石百七を納之  
未納島山二千七を納之申  
之為千七を納之申  
一向不及此事  
以神乐月勝色千三  
且下下之申  
此為一投之申  
武家子弟の申  
申す下下之申  
此為一投之申  
武家子弟の申

因役因裁更是内侍前御祐奉掃了案  
且下有下所也

十二月十日

飯尾加賀守殿

世切舟松原ヨ墨之切  
奉納之下書  
大納云入乃之処  
血相之河も  
是年

請取申内侍取御神采用脚事

合給拾貫六百文者近年減升

右取請取申如件

明應貳年正月十日朝貞

御神采侍奉申御心云納言院雜掌

今日御神采也用違令間先从他足日長橋房  
下行之処及吹飯尾如賀守清房以使者日用脚  
三千金之納了平之給召人可下行之先下行房  
明日度可請取之由返答了仍古一日世請文  
令持青侍人史三人自由表奉祈下之於  
御倉玉泉坊法云々進長橋

内侍取御神樂下行延德四二月人  
以佳變明應元中山中納云

四百七 行事取元五百七也近年四百七也

貳百七 内藏寮

貳百五七 大膳藏中山任文二百七也其時申子細  
五七下行

百七 木三寮

百五七 陪從代

百五七 迎衛召人

百七 人長

五十七 篋中葉

五十七 掌燈

五十七 出納

二十七

戸屋衆 主人

四百七

掃中寮

五十七

主殿大夫

五十七

拭 以下行奉供奉ノ典侍ノ少佐也  
近年以五月下旬

三十七

布帛持各御訪 延徳廿度初列之百蔵寮領  
不知行之由中寮之中中細云

五十七

内堅 傳奏之時如以下行

以上

百七

四辻前中納言

百七

右衛門督

百七

前源中納言

百七

且落寺中納言以上近年之儀也

以上

八百七

刀自三人御訪 同前

以上惣都合二千六十正

西暦二二七下仍同之  
但布帛等下仍三十七  
類之由長橋橋邊

三節舎のうり用れ奉 廿一日

ノツリノ一六回屋くの事ハハハハハ

もツリノ一六回屋くの事ハハハハハ

ノツリノ一六回屋くの事ハハハハハ

清房うけこむをいふし一福よ一ありや

もつり一ありや一ありや一ありや

し福よきたりや一ありや一ありや

敏信もおもひありや一ありや一ありや

ひびくしはあふりし

白苗内行りの流

少の依正系 内白苗用脚

幕折止能方辨別解叙位被叙志不

事是事可作法房に申立下

無叙位有白馬幕舎例吉凶可被領

下申立下

上外祀敬

今度神神系用脚申立下志幕に申

及部被叙幕志幕舎用脚一丁

下申立下幕儀に志幕に申立下

方辨別解叙位未出被叙一丁不可

事是下申立下幕儀叙位に事不

吉作一丁に外之丁に事に

懇申下申立下幕儀叙位に事不

十二月九日

飯尾加賀守殿

幕折諸司下

此年再無神神注

竹玉 五十疋

糸物 御贖物 以下

三十疋

木二寮 三十疋

掃尸寮

五十疋

清皇子りの子 二百五十萬年六月 令婦 二百五十二更下移

以上七百十皇子命婦大御所事門下有被仰旨 直被下

同 追儼 此年再與

六位外祀 五十疋 六位史 五十疋

召使 二十疋 陰陽寮 五十疋

掃尸寮 二十疋 大舍人 百疋

以上三百疋

四方拜

掃尸寮 二百三十疋 木工寮 百疋

掌燈 三十疋 出納 三十疋

戸屋衆 二十疋

同正 以上四百二十疋

測辭

主殿司 百疋 大膳職 百疋

女孺孺 五十疋 掌燈 三十疋

以上貳百八十疋以上字系分千七百二十疋

同正 叙位 傳奏中山中細言 但位祀宮五十疋請仰新調百疋 延德四年下行同之 同雜具六十疋云此度右新調云

大外祀 三百疋 少内祀 二百六十疋西人

六位外祀文 四百八十疋一篇 召使 百疋

陣官人 百五十疋 主殿官人 八十疋

出納 百疋 掃尸寮 百七十疋



木之寮 百五十九

大膳藏 五十九

<sup>内竖</sup>主鈴代 七十此内  
代  
二十

使了 三十

掌燈 五十

硯雜具 二十

主殿司 百

女孺 五十

以上二千百六十以上女孺三千八百八十

<sup>明應三</sup>三節會惣用事 次才錯礼  
延徳四下仍同之  
但相重不注

少内礼 百

六位外礼 三百

六位史 延徳四  
二百七十

内竖 四百

内膳御膳方 三百

同御坊 百五十九

小預御膳方 百五十九

同御坊 百五十九

出納 二百

御倉小舍人 七十

主殿官人 二百西人

陣官人 七百西人

召使 二百

产屋衆 六十

装束司史生 百五十九

官掌 百

大舍人 百

筆筆 百西人

使部 二百

仕人 百

掃了寮 二百五十九

木之寮大蔵者 二百五十九

大膳藏 百五十九

殿上再取掌燈 百

南殿再陣掌燈 百五十九

尋常版 七十

殿上冬 百

陣冬 百

布草 二十

采女四人 千延徳四十二

髪上得選 百西人延徳四十六

主殿司 二百五十九

女婦瑞 先德三百五足

二百三十足

内教坊

百足

國司

七十足

御膳手長

七十足

北陣官人

二百足

舞人方 二人右ラヤト

六百五十足

衛士

二十足余

以上八千五百六十足

以上三節會三ヶ度各分一度下り也

内侍酌供神物

百五十足

幕分心經

九十足 元百足也

御齒固

百五十足

元目カリノ分

御強供御

四百五十足

臺取潛物

百足

以上九百足

以上惣都合力二千二百八十足

以上明應二正 佈婦廣光 傳奏也 於長橋下約云々

無叙位議有白馬幕合吉例事

康曆二年三月九日叙位議無之

神木在治之時叙位議被行之條曾無先叙被  
尋下之被經御沙汰停止之

白馬節會如例

康應二年正月五日叙位議無之

御初初度自叙位被初例不分仍  
停止之

白馬節會如例





自乞類一知津使所抄るし河内是後北を  
張大百是事因治治之く一但在取者別を  
御倉至今日二用と承明の取し各心得り人  
事の残下新と次戸令同志也知所と  
御と下し衆不て御用と治

河内

敏庵が答もあ

ろく有万是のなりふあすまのの百是まのり  
しんすものなりふあすまのの百是まのり  
きりありしりきり一と家文とも仕えすれん  
よもせしれしりきり一と治房しつるの

万是前折つて言ふ方ねる人すいふた下り  
と福又前舎うんふとあまのりきり一とこの  
ふと百是りしりきり一とよ前舎うま下り  
はりしりきり一と百是りきり一とこのり  
しんすものなり叙位にきり一と二十ち中七  
りきり一とふと百是りきり一とまんがりのえ  
き仕らんすものなりきり一と百是のなり  
まのりきり一とこのりきり一とわくしりきり  
下新とありきり一と武家のなり一と用しり  
りきり一とわくしりきり一とせんきり一とわくしり  
はのりきり一とわくしりきり一と始終せんわくしり

踊り人下り人 為度もく 踊り人下り人  
下りの舞人の出たり 音奏也 大鼓陣の奏の  
うらまひの二百也 七五三の音 踊り人下り人  
踊り人又下り人 踊り人下り人 二百也 踊り人  
踊り人又下り人 踊り人下り人 二百也 踊り人  
又下り人 二百也 踊り人下り人 二百也 踊り人  
踊り人下り人 二百也 踊り人下り人 二百也 踊り人

請取申 節會御用脚事

合中上志

右取請取申如件

来りる割符を

明應二年正月三日初賀

去年踏歌節會 右舞人一人 闕如自南部  
罷上云々 當年 踊り人下り人 踊り人下り人  
不とりたり 踊り人下り人 踊り人下り人  
踊り人下り人 踊り人下り人 踊り人下り人

以中如件

踊り人下り人 踊り人下り人 踊り人下り人  
踊り人下り人 踊り人下り人 踊り人下り人  
踊り人下り人 踊り人下り人 踊り人下り人

踊り人下り人 踊り人下り人 踊り人下り人

之節會也 踊り人下り人 踊り人下り人 踊り人下り人

此は下下人毎又叙位と云ふ事  
不吉候上之是、中早し、下は下人  
之候

可なり

伴務守候

此用之是内之是、以割符一町の候  
八百之由余し、下は下人毎又叙位と云ふ事  
不吉候上之是、中早し、下は下人  
之候

此は下下人毎又叙位と云ふ事  
不吉候上之是、中早し、下は下人  
之候

可なり

飯尾加賀守候

此は下下人毎又叙位と云ふ事  
不吉候上之是、中早し、下は下人  
之候

ナカノチノ下付アリシヨリニ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ

シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ

清取申 常會御用脚事

合五百七十五

右の清取申如件

常會傳奏  
中沙門大細之我雜掌

此用脚以清取申  
進長橋高

シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ  
シテ又其ノ下付ニシテ



明應二年

明應二年貢馬惣用下約事

門侍所御神志

此所系御元貢馬三千六百疋也

行事取 四百疋

内蔵寮 二百疋

本立寮 二百疋

掃下寮 四百疋

大膳藏 二百疋

信從代 百疋

近衛戸人 百疋

筆算 百疋

人長 百疋

出納 百疋

戸屋衆 三十疋

主殿大夫 五十疋

内監 五十疋

式部 五十疋

掌燈 五十疋

四过部中納言 百疋

右衛門侍 百疋

後量部中納言 百疋

李經卿本拍子

貴仲卿和琴

供奉典侍沙汰

通年若用内

後量部本拍子

元長郡留

丹露寺中納言百疋

刀白三人

二百疋

以上三十三疋

武家用脚三千六十疋進之四指五分布單  
三十疋每下行仍減二十疋進長橋為但自武家  
直納向當局於後局若下仍也又大膳減延德四年  
注文二百二十疋也其時申子細首五十疋下行也

明應二  
節折 自去年再具大札六札以來七情

竹玉

五十疋

祭物

三十疋

巫子

三百疋

命婦

二百疋

掃了寮

五十疋

三疋

節折干長  
附贖物

此外自公家亦仍行

以上六百五十疋

遠離自去年再具

六位外記

五十疋

六位史

五十疋

召使去年

五十疋

陰陽寮

五十疋

掃了寮

三十疋

大舍人

百疋

以上三百三十疋

明應三  
四方拜

掃了寮

二百三十疋

木子寮

百疋

掌燈

三十疋

出納

三十疋

戶屋衆

三十疋

以上百二十疋

副辨

主殿司

百疋

女禮

五十疋

大膳祿

百疋

掌燈

三十疋

以上二百八十疋

三節會分明應三

少内託

百疋

六位外託

三百疋

六位史

二百二十疋

内豊白馬 西人各分

四百疋

内膳御膳

三百疋

同御坊

百五十疋

小領御膳

百五十疋

同

百五十疋

出納

二百疋

小舎小舎人

七十疋

主殿官人

三百疋

陣官人西人

七百疋

右使

二百疋

之屋敷

六十疋

裝束司史生

百五十疋

右掌

百疋

大舎人

百疋

筆葉西人

百疋

使下

二百疋

仕人三人

百五十疋

衛士南殿 掃除料

二十五疋

掃尸寮

二百六十疋

木之寮大蔵者 在此内

二百八十疋

大膳祿

百五十疋

殿上再御堂燈

百疋

南殿再陣堂燈

百二十疋

殿上疊

百疋

陣疊

百疋

尋常版

七十疋

布單

三十疋

采女四人

十疋

髪上得選人 西

五百疋

主殿司

二百五十疋

女孺

二百三十疋

内教坊

百疋

園司

七十疋

御膳年長

七十疋

踏方尾張人

五百疋

雜人忠之申糧物三十疋

南都甲下

北陣官人

章清父子

二百疋

以上六千二百四十五疋

此一慶ノ所訪ニテ  
ニ節會ニ奉優之

明應三  
叙位 自去々年再興

大外祀

二百疋

六位外祀文

三百疋

少內祀文

百疋

召使

五十疋

陣官人

百疋

出納

七十疋

掃中寮

百疋

木之寮

大藏省左近所  
掃中寮減在留

七十疋

大膳祓

五十疋

主殿司

百疋

女孺

五十疋

主令代

七十疋

告年燈 中殿長

五十疋

陣掌燈

三十疋

硯雜具

二十疋

撰定硯雜具

三十疋

以上千三百九十疋

去々去々年此下行情半  
且儀之百下行

心侍取供神物

百五十疋

同御堂

百六十疋

節分心經

五十疋

水無願殿

百疋

甚高督物

百疋

御齒固

百五十疋

御強供御

四百五十疋

以上千八百八十疋

以上物都合万五千六百五疋

自武家進分

以上自禁裏被知人吏直領  
向高店於被居下行之者法  
余加銘也中人抄系也

三千六十疋

御神示料

万疋

三節倉料

三千疋

叙位料



し印下ろるる字を細くして指法取  
清取中 節會所用時強事

合子の百之志

右為清納不請百申

如件  
節會傳委中御門大納言家雜筆

明應三年五月十一日 朔 貞判

此清取ノ袖武家奉初此古

此分以禁裏元三節服要脚

四後内之有る也

同右法房判

貞通

武家切

はは下云振言信豊は貞通判し  
人丈い中合を初乃武家切法り  
類又之知也

まりのうらうら此強のしり多し

プつりしうらうらあまの武家

プんえいあうらうらあまの武家

うらうらあまの武家

久納プりしうらうらあまの武家

下出のうらうらあまの武家

福よあまの武家

のせいのしんしん... せんせん...  
ふに... せんせん... せんせん...  
せんせん... せんせん... せんせん...  
せんせん... せんせん... せんせん...

のあし

せんせん... せんせん... せんせん...  
せんせん... せんせん... せんせん...  
せんせん... せんせん... せんせん...

せんせん... せんせん... せんせん...

せんせん... せんせん... せんせん...

せんせん... せんせん... せんせん...

せんせん... せんせん... せんせん...

せんせん... せんせん... せんせん...

せんせん... せんせん... せんせん...

せん

権大細云判

渡方  
二条殿  
明應六

宣流



宣下  
宣下  
宣下

明應六年六月十八日 不朔 開白 宣下

二條殿 右大臣尚基云廿七策 陣儀等仍以并宣秀

初任 朔后上卿 中御門大納言 宣胤 六位外記中原康貞

兼史 大門記不系少内記同不系康貞为代

下仍事二百人 康貞二百人 陣官人

三十人 陣官二十人 杖以上日本家沙汰

乱後新儀也 牛車共仗事以代例之也 日

一在子 同之也 他日也

同年十月十日 薨給當職又个月未拜領

不及牛車共仗宣下

同月廿三日 開白宣下

一条貞光 兼任 才二友

御當藏二條殿御存任由之致由新務之  
精藏之由以并殿以在行而也此執在如使

六月廿一日 右兵部尉秀重  
讲上 春日社由熱官御中

山城國祝園庄所有御寄進 春日社也全  
知行之致由新務之由以并殿以在行而也  
仍執在如使

六月廿一日 右兵部尉秀重  
讲上 <sup>祐次</sup>辰市殿 當官不知同是如中

丹波國小原寬谷有御寄進 當社也全知  
行之致由新務之由以并殿以在行而也

此執在如使

六月廿一日 右兵部尉秀重  
讲上 大原野神主殿  
任是親言戶之親由是也  
權抄ありて是也

丹波國石川庄所有御寄進 吉田社也

全知行之致由新務之由以并殿以在行而也  
仍執在如使

六月廿一日 右中務宣秀  
讲上 吉田侍從殿

播磨國岸部南郷可有知行行由  
殿下之承父而也此執在如使

六月廿七日 左中弁宣秀

沙上清三位入道殿

以上所記事有之書

當寺園諱事以外次第也沙上破裂時  
節依松之覆靴云云之形謝之奈志以之於殊  
程之沙破裂致致何事如之卒以謹慎之餘  
御尚織之形退二條殿之形任人衆徒爭之慎  
存自守然同日及沙上憲別之形迴以籌策  
也子先退兩方之軍勢退之及是形之評後五委  
兼川志之有一版之形成致以不日言之形之也  
之形也之形也

六月廿七日

宣秀

多武峯換換三綱之申

六月廿七日

山尚織二條殿之形任人任先親早

之形申之形也

黑田庄以出書直之形伯口不入手之形

箕公事之代友事進者判官忠總之形申之形

六月廿七日 申之形也

七月十二月、一月三十是之由日殿下之形也

備前國鹿田庄 教在町留 大和國依保殿并宿院

以上宣流之形之由有之書 六月廿七日

南曹事宣秀之存知之由有之書

少卿使畏入付東口箕之事等事より由は作  
り執事畏入付但此乃不及沙汰に相尋り今  
西口事又十足に分る作定ふ先分る作人案  
内名に於て為り御あり東口事も存知之仕  
事もやと存

一法成寺平本院執事行内取一為り一法成寺  
より松枝土器を付し七事事し外に其御自

平本院ハ右ハ毎月百是つ沙汰しとハ十未つ沙汰  
云沙汰し高橋上在しけけ分今も美ハ直と在し  
亦存知りしり新橋喜々未案ハ長つ然と存知り  
以ハ定り書連院取可りし見と存知り書案  
ありハ存知りありん

一江州殿上未り一案取一為り一以秀友清三位

入乃度と申以乃清三位ハトシハ存知り

一諸公事注文を上人を清殿ハ八器取取よ  
半飼定定使仕九年預政取ハ沙汰し由し  
案ハ内ハ存知りありん

六月廿七日

本懐中御方

箕公事西口八子殿比領桂三取之由を藤中  
諸之事八年<sup>別當</sup>預半分知所の在御殿三八廣橋  
ト以侍ノ宗統後ト友人知所一糸及二糸殿之  
織之時ハ此方年預也隨然少知所少

六月廿九日火ハ之ホクリセタニツ掃ス夕之<sup>ツカ</sup>焚<sup>カ</sup>柄  
東口ノ箕 以上公事宣秀ニ抄也有以書辭申

備前國蒙懸庄任先親之有知所之也殿  
下之事多也之也

六月廿九日

土御門二位殿

右長恙宣事々々々々有少書札幕下有  
存旨之同愚意内之書成之  
依之江大谷之書伯之之黒田庄入手替地

御當織二條及河原任之曾万布在池田庄亦

任新子任先親あしつる事由り有也

七月了

宣秀

西南院有

御當織二條殿の御下長瀬長田殿任  
新事任先親あしつる事由り有也之  
海

七月了

宣秀

松林院殿

去月十八日二条殿の當織の御任に  
祐次郎為官言信存知方と云ふ所  
取多しら中入云お世し

此方の善お世事と云ふも  
延比方よりハ之然と作由を結句  
勿神思念之振之ハ始終為意い  
菌店子付し師事し云お遠く  
中よりハ一版てお珍事し  
多しつる由りハ一版てお珍事し  
多しつる由りハ一版てお珍事し  
多しつる由りハ一版てお珍事し

七月了

物貞

辰市殿

打紙  
法當織二条取々存何の宿後出年貢の事  
諸人子走々分れ嚴密に執を以て保出  
の執を以て之を以て

七月一日

物貞判

松陽院の坊

打紙  
織二条取根々存何佐保殿の年貢の事  
嚴密に執を以て保出也此女

七月一日

今井山城守

物貞判

新在書局

具ノツカノ院雜文也

接津園新屋左可被知リ、之由殿  
下流の事又少く物如役

七月一日

左中弁判

新之外紀取

師親也

有々書

此方より下し長老宣書を上げて但日私  
可事催役不事行以爲返上し之然に根之  
由り之を以て之を以て

七月一日

宣秀

本懐中物取

下老南部使 院雜文七月七日上洛

春日社西南院 松林院 辰市 祐梁

望上為之 口通七月八日 二条院

大法師曉覺一為春日社安居師之

由之令下知法久長者宣如此事之海狀

明應六年七月五日左中弁宣秀

沙上興福寺別當僧正涉房

被長者宣備大法師賴感可賜去

應永廿一年分維摩會初夜研學豎

義請之由宜遣仰者

長者宣如此事之海狀

明應六年七月八日左中弁宣秀

沙上興福寺別當僧正之海

右ノ二通寺務ノ舉狀到來申取下書也 安居師開白

初任ノ始定ノ職中不易也此曉覺ノ在二里上補之至

當年日人死今度復請也大法師賴感ノ去年三月廿日

大弁家<sup>幸</sup>朝臣書也長者宣隨於依長者改更又致成

長者八關字也但彼一仍上ノ書板書合宜也



當時寺務ハ喜多院權僧正空見也

ハ状ハ村伝方也

玄空上人号事自山口流中事し乃之有勅許  
由ら作りし道法有一条殿中不事仍以起此  
作し西目一版之祝意之由之書之之御あり  
介の端旨を入之難波系下戸入由付之巨細  
投祈之系中由付之由之之之之之之之之之

七月十九日

大納之僧部之房

宿院右事岸田以間互系仕由難波中事  
事付之由し下代友之松陽院千足分其叶也

志定之別人之難波系下戸流之能之之之

道又臨之海房中事之山城園置京於河原院領

狭川代友仕奉之由法之古市親類之自技方只

以之根之作者之之畏之技河原院之聖天

無隱中事之結人信傳之事同難波中由之由也

之之之之之之之之之之之之之之之之

七月十九日

大納之僧部之房

多武美之事事之授め之承取引之守之之  
由状之付之之之之之之之之之之之之之  
事ハ之之之之之之之之之之之之之之之

又取川にしましきをいへり打置るの事知れぬ  
奇家への切めして作らるしと事あり極多  
は常職の事と方ら作らるしと事あり二条の極水  
りハ常職と方ら打置るハ五斗と方ら坊長  
事ハ事思ふと作らるしと事作付し岸田と事  
乃方方と作合ありと事と事と事と事と事  
と事と事と事と事と事と事と事と事と事  
七り十九日 物貞  
南の坊と事

播磨國伊保庄に被知りし由

殿下御宇久しに於て

明應六年七月のち中弁判

治部に入道候

長真宿禰入道法名壽庵也  
子時之宿禰日今名時法庵也  
也有由書

多武峯子と事一と事一奇家喜沙法曲事と事  
ら思合申起し付しと事と事と事と事と事  
取川に名取の何と事と事と事と事と事  
未と事と事と事と事と事と事と事と事  
け方と事と事と事と事と事と事と事と事  
守能所く是也事と事と事と事と事と事と事



去日社安后结願沛卷教之批子下  
早以秋意之由也之修件

丹一十二

宣秀

返事之方不書表書也對面有立身

御請申 宿院名之事

合伍貫文志

右此法要脚志被負教每年檢意儀運送可  
申有限分曾以不有云沙法候志也の法清狀如  
件

西應六年丁九月五日

南部松湯院 竟藝 判

當寺圖諱事御口入之延不及之返事之案  
以外次才也为其役志之被為志寺官事原  
出別當可之處罪科志也其又惣寺云水川  
志之及一段之成敗子細不日了了是也也  
之也也之

九月七日

宣秀

多武峯檢校三總之中

每通也

多武峯山麓流水中

多武峯山麓入るる所より湯取次湯斟殿より  
申上りて御侍は去就し勅使事より寺  
より事あり及度らるる事あり日京都  
作事ありをいひ難温曲事より分るる  
事あり及一服より湯治より事あり  
御侍より事あり自初より事あり  
七別當法橋院より事あり寺より友藏を  
いひ又下山より事あり和より事あり  
寺家より事あり事あり事あり事あり

不及以今平人寺家無承川志て及一服より成  
敷し子細より事あり難温曲事あり湯登山より  
事あり由嚴密より事あり和より事あり  
事あり事あり事あり事あり

九月十七日

胡貞判

南坊より

攝津四岸部南郷より有る所より由  
殿下湯取次より事あり

十月又日

土御門二位后

右立而清三位入后辞申  
力蒙懸在替地行

法成寺再平等院執印事可有御  
存知(由)用白殿御消息而也以此旨  
可之申入舅珠院前大僧所房給御執在  
如仗

十月六日 左中辨宣秀

紙上大納公僧都の房

明應六年十月十日殿下薨給共七歳

今尚穢又个月未存候未及牛車共仗  
宣下

渡領所 今度随所及

祝園庄 山城

小原電谷 丹波

石川庄 丹波

鹿田庄 備前

散在町 留日

佐保殿 大和

宿院 大和 七名在

賀茂村 播磨

味舌三宅 大和 二子四百足

岸部南郷 播磨

黒田庄 播磨

佐江大谷

良口園

乾口園

群戸 播磨

裳懸庄 備前

池田庄 紀伊

曾万布庄

長瀧庄

長田庄

桐野河内 丹波

輪保 近江

安孫子 日

首頭庄 日

宇治所

番衆金殿

月別 水田

上座分

寺主分

都維那分 権別當分 巨倉執行分

願福寺領分 平等院執事

公事物事

一つらー一からー 一しゆまや  
 一いんちのうまー 一すけりさ  
 一すれー一とー 一さむら  
 一うー一まのきー 一ふと  
 一まきー一あめー 一いさ  
 一うすまー一んととー 一いけ  
 一ちかひさく月つらー 一さすま月つら  
 一さうー一二月つらー 一ふけ  
 一ひさ  
 一すまー一うら  
 一いさー一うら  
 一すりまら  
 一ひさ  
 一そのさ  
 一せんさんひら  
 一ひさ  
 一尺  
 一あやせん月つら  
 一すりこら  
 一しゆ

一すまー一うら  
 一いさー一うら  
 一うまらさ

大いこめけあかーをー 一物もくりくはあめ  
 あんよらあつあうらー人よりんえりれく  
 者んハんうーるい名んぬぬらりーくあめ  
 ぬさんりうらーありーしーすけしー

七りうらー判  
は正文をあらうりし  
写玉函を

左をのうらーんぬら者  
四代百六十九町余

能勢庄 橋本庄  
橋本庄 橋本庄 橋本庄 橋本庄

船岡山 新屋庄 俣保庄  
船岡山 新屋庄 俣保庄



吉養庄 遠江 小泉庄 駿河

先田百町年貢絹四百足余年貢布三百反  
又白布六反

宿院七名

松磨名大丸、松武、稻吉、永安、山永、安月名

渡方

一条殿 再任

自明應六 日七

多武峯 破裂  
事有

明應六年十月廿三日開白 宣下

一条殿

前用白前太政大臣  
冬良公再任才二御歳三十四

上卿中山中納言

宣親

并宣秀乃朝臣

奉行

大内記

和長朝臣

不系少内記安倍盛俊系陣於

詔書志和長朝臣作進四位外記史不系六位

外記安倍盛俊六位史日盛遠系陣作詞從

一位藤原朝臣冬如元可アサカリモウス開白方持ツ依安貞二年

例令作詔書ヨ牛車兵仗友氏長者如モト舊

陣下行事

百八十足ウノノ分之初任二百足宛也

百八十足

外記内記兩人分凡百五十足宛分三ノ  
内北分三三足如坊父子系乃如也

五十足

六位史依有友勢尸子細少分也

百七十疋附发人 二の二百疋より由堅 一の百又十疋外二十

以上夏弘控本家回答定む裁附をホ下り  
如係乞下り斗礼以来斗之

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '和長' and '大島']*

和長 和長 和長 和長 和長

和長 和長 和長 和長 和長

と年々うれ申るうてはさうなほ公平もらぬ

とて人ともさくくさされりしりしからよと

のみん宛りしれりしりしからよと

とて人ともさくくさされりしりしからよと

とて人ともさくくさされりしりしからよと

とて人ともさくくさされりしりしからよと

とて人ともさくくさされりしりしからよと

とて人ともさくくさされりしりしからよと

とて人ともさくくさされりしりしからよと

中々門もの

十月二日和長朔長状が来小別當公法上式侍亦福之  
存知く条子由之と由りて以後状同日入廻除小別當  
分より三分一と由り作事也云々

十月二日表日社司状が来表日祭初支干八社家へ依  
ふより引下り支干上口弁亦誰人印斗也件状表日祭  
春日祭事上口次下祭向隨及教日之少沙汰長人又  
領状より取ら付社家也存之旨一被云力之遂切  
之由一と下知社家治之方内より作り也存  
状之

十一月四日

以年負

冬光

以物方と被取之尚季祭事上卿以下隨  
及教日之少沙汰事引下り付社家也由是作  
初元朔家逐年経目由零落以事一重而隨及  
社所不<sup>二</sup>寸し後年之再具より一途为一社之有  
評候由由是の執事支

十一月四日右兵衛尉秀重

表上表日社取惣友より申

一条殿去月廿三日御藏より再任し諸家より再  
具より一社一同より抽替り候之由日ら  
作下也

二條殿去月十日御地界より是併り被列志候

初謝至く涉啓、乞河内廿三日一云、此内再任、  
三戸ノ初、殊又勅使、来月中、ウ、ウ、ウ、ウ、  
法、の、京、都、の、家、不、  
之、  
宣秀

十一月三日

宣秀

多武家子換校三經、

隆惟勅使、与家号、勅使、  
大别、尚、祿、法、公、事、役、事、得、分、可、  
沙、之、分、二、志、  
消息、  
宣秀

十一月三日、  
宣秀

并上菅少納言、  
和長朝卜也、

法成寺、再、平、等、院、  
之、中、  
治河、  
宣秀

十一月廿七日、  
宣秀

下、  
大納言、  
宣秀

廿七日、  
宣秀

春日社、  
宣秀

右、  
宣秀

勤切可奉抽泚祈禱之精誠狀仍言上水件

明應六年十二月日

當社若文神主職事任例重服一廻申就為職令並  
常以隆然祐智吉帳之上志任代相傳之先親ら成下  
長志宣志承以祈禱之可目出旨一社一月言上久  
比以旨急之也此故重務以思之

十二月二日春日執行正禰祐澤 在判

禰上宿院由目代友

所被禰當社若文神主職也二と存初也其等友  
以等引所也也此執事並此使

明應六年十二月二日右左衛尉秀重

献上春日若宮神主友

右引礼多友下五百是南曹百足 此の二百是の數符也  
由作事

今度二條開白殿之他界定日多付廻所之  
所作之寺門神主之法令多執行之事身之乃如  
此中ノ縁圖之儀定而每度は方之作扁之節目  
以是承隆然之友二條有御事取混礼子細乃  
之分の所詮治定月日所叙之作出之而作之  
由之有之被承之之之也

十一月十六日海京一取之宗

中門外々々中

委細承了二条外去十月十日  
々他界涉家廿七ツ上世以尔事以同月  
廿三日一条外涉再任二好々去中地  
之々々  
朔貞

十一月十六日

为文致礼延川为十二月十七日

使桑田采以人權建師口宣了以袖取本状在門外

外考南曹方也口宣采八藏吏

十二月十日為武家雜掌寺信上洛申告文

使事巨細在以次進少無任以礼殿下三百足

之荷此三荷私分百足一荷此一荷

先叙八申告文使了雜孝上洛上礼也

去春已必以通用不之然

嘉例之案未代地八十足只今定上上以以方

之御極涉被系在御之之禮清々

十二月十六日法系下義賢判

在上中門外

嘉例之案未代地八十足只今定上上以以方

之々々

十二月十八日

宣秀

多武事檢校三總中

右八十是代物之檣柙百柙子三百串一柙三連私系又在之河及下又十是私系之十是治之時斗一礼中一青侍下向之時おる家戸定也

十二月廿二日多武事告文使参向宣秀

文細在別帖

平等院執事令旨未及之男且可ら

存刻之由上ア九板ニ書合キ取下之字及少之条如文

明應六年十二月廿九日左中弁判

伊豫法眼之房

青蓮院坊友泰中也平リ也殿下  
文アリ

勸学院政所下

可致沙法恒例仏供神事等更

右件神更等任先列宣致沙法之依

长志宣所作如件不可遠失故下

明應七年正月廿日知院事高橋朝臣判

別當左中弁左原朝臣判

右告書院雜色八日持来加判信者之書之乃、此告書

改年冲受賀遂日之字與之否有之隆限之幸甚之

柙当社年始八之日以神事復旧候之遂行天下安

全云武長久之以新柙在抽格熱以方二三經出



奏安人比方之より被處之より一證之

正月十日春日執行正頭祐澤

社之師種

講上宿院日月代及

右状不及尸入也

尚季急事可わ式見心五年大略自社家ら  
中延く極く巡涉江を一生て少く亦自道方角  
意よりあし三尸左太く由ら作り也ゆ執連  
如彼

正月廿三日右急來尉秀重

講上春日あ想友の中

抄紙也

就之交尚圓錯礼之儀号軍忠多武奉法師亦  
任雅意而寺社領礼刹嚴至之談義而大佛  
供庄以下兆分ノ課役お懸ノ条殊事大方夫神  
國ノ称号去貞若墜以卯次才ノ而給就之及均  
与由廟鳴動水先祝之也勅使集回之由之由  
之受し惣之と作爲均以下向之及嚴密之沙法也  
之と決らら均之と之と沙法之由字仁集之と評  
定之也之と

二月十日右供月代壞刷

抽苗木法橋ノ房

小狀  
龍安武家之後寺門新御至狀出至來方源在  
申し二條板内御法傳四神志至玉珠之畏入申  
け旨至方被露至之至法至

二月十八日 益藝判

南曹并取  
御車行取

御車至方被露至御令尸入取下法至武家  
与取方至思食方被露裂事降及世方  
沙法系及法系至虚脱至申入事至日寺門  
之方至由取下方南曹并取取  
也御執在如父

二月廿日秀重判

抽苗木法橋御房

大法師曉光可力 春日社安居師之由至  
下知法志 志宣如法志之海狀

明應七年三月七日在申并宣秀

沙上興福寺別當僧正房

去年日付沙有別當僧正狀

被 志者宣備大法師宗宣可賜去應永二十

一年分維摩會初夜研

宣遣作者 志者宣如法志之海狀

明應六年十一月廿五日在申并宣秀

沙上興福寺別當僧正房  
沙上二通与有別當僧  
正奉狀

多武峯寺衆徒等謹言上

柝去正月一日戌尅大織冠大明神御面破裂  
り尚月廿日戌尅神拜り早、然、後左涕  
眉下横一寸并右御耳前竖一寸三分以  
破裂任先傷以占取亦之儀可し、奏  
前候亦御忍儀仰禮之

四五七

三月廿日多武峯寺衆徒末

進上 中御門敷

就大織冠大明神破裂以儀候後海寺に致候  
儀、但先傷占取亦之儀勘文に下り可  
力前候、理り御格に代伍拾是之を上り候之

~~~~~

三月廿日 法平 豪賢

進上 中御門敷

下明直七三九二

多武峯寺衆徒等謹言上  
此れは先傷占取亦之儀勘文に下り可  
力前候、理り御格に代伍拾是之を上り候之  
就大織冠大明神破裂以儀候後海寺に致候  
儀、但先傷占取亦之儀勘文に下り可  
力前候、理り御格に代伍拾是之を上り候之

中御門敷



中并甲し目也並被祈請者無其外乎

明應七年三月廿二日陰陽頭有宗

<sup>三并三</sup>武安子の白文をりしやそ返下されし

ち家へつりしりしこのりしりし

りしりし

向南内侍のりしりし

先規隆子入禁裏白文二入見系之在在

りしりし

神躰之被裂事注をりし旨ら警思食の白  
文ゆけりしりし波新謝深又告文使事又りし

申沙法之由ら作りし柝之被裂事世方之沙法事  
舊之処無注をりしりしりしりし正月一日  
之儀神をりし悔念云勿祈の正月一日之儀  
ら存知し系以りしりしりしりしりし  
注を祈事し且先規之りし云白文云告文其子  
細て載し並石自真福寺去月ゆけりしりし  
りしりし極之りし調法又之織し再任の礼去年  
りしりし時りし柝未りし雜掌下向し志りしりし  
由りし定干之無し儀し里りしりし又りし  
代りし定りしりしりしりしりしりしりし  
りしりし使直持系りしりしりしりし

三月廿二日

三月廿二日

武蔵守 検校三總中

三秀

此武蔵守此事白文ありぬしとて  
そのへけさびよ入けさぬぬのさあそ  
箱よいまことしそくしりしゆふ代  
すいさのゆきし礼をいさすか  
入しとささるあしりゆふ事し  
立られともころころいさす  
いさあしりゆふいさす  
まの申すしこの言よりいさす

まいを礼中しゆふせらぬを  
ころころいさす夏ふゆころ  
いさす身真しゆふいさす  
りしゆふ

文内より  
のり

日日月月 櫻妻女房 名

せんんのやういさすあけのほ  
まのころいさす中いさす  
又この前よりいさす  
せんしりしゆふいさす  
志るころいさすいさす

と書んや、即ち又あるのよるを、るゆゑ  
ふとわんとして、  
日日以勅定お為有宣つて、処台文一字も遠  
也副打紙云先別ら作出、又武安寺、  
毎方用白殿、以、  
付勾当を、  
有宣

自去六日、  
ウ行務告文使系向事、  
ら作り、  
家忠、

比前、  
後、  
作、  
横、  
作、

四月廿六日

宣秀

武安寺、  
并秀法眼事、  
各、

四月廿六日

朝貞判

堂方一同中

焼燼海京中

殿下御ふ例人ら觸満より新袴半より抽替燼  
殊告文使来向事来月中之御為る也使常弘  
下向し能くら申合法一危右之有るも利之三人  
新之年瘡之候眼ふく靈治未代之寄物世之  
比新牙之沙法之系款思食之建續之候大燼治  
有上察子く之り沙法之申ら作下也之候  
四月廿七日  
宣秀  
多武峯檢校三總中  
依保乃の年貢より九月宛在二所以処去年

由年一向ふ及一粒く沙法以外事は生志之  
ら作付別人之申也ゆ執連水父

四月廿七日

朝貞判

新庄忠房 院雜之

南曹

茶十袋一打

院雜之之之之 又月一日

勸学院ノ跡ノ茶園之

又月十七日多武峯雜之上洛告文使也  
此之候之り井のりこのひのりい  
して此之候れりまてほりよるけ  
りよまをせれりきりくきりやん  
よりあよりし人おりおりし





リそやうしあまよやうとあまやうよと警を  
とふくよかの親臣兼向をせられしおほ  
物しういひをいりしういひのうい  
南曹のういも辞退ししういし去年御  
再任のういも御りしういし御りしうい  
兼向しう職よはしういしういしうい  
とすしうい御りされしういしういしうい  
御りしういの外よはしういしういしうい  
りしういしういしういしういしういしうい  
いしういしういしういしういしういしうい  
ういしういしういしういしういしういしうい

しやうをいしういしういしういしういしうい  
りしういしういしういしういしういしうい

此のういしういしういしういしういしうい

あまのういしういしういしういしういしうい  
とすしういしういしういしういしういしうい  
時あまのういしういしういしういしういしうい  
よまのういしういしういしういしういしうい  
ういしういしういしういしういしういしうい  
ういしういしういしういしういしういしうい  
ちそしういしういしういしういしういしうい

のりし志すい丹のりかましく字あてんるへ  
おぼせしとせしうれよほさんかのみらんかたもせ  
くさくさおよりひらぬりましくこのより  
顯弼に敷上人の時糸向るり平重服新時  
先よりぬるりおぼせし後より教るりしゆ  
熱歎を察す

初門至去月其月八日  
及下一男

一殿下り蒙二日月辱しり心字と名不及り平外と蒙  
御就けり病神内印変二沙汰印しおり平外と蒙  
是西より沙汰と名若し云殊りりか一定り但と名  
と六月土用時か云是來存り養性肝要  
一春日大明神より符より由竹内殿より居り細河殿

より再任りりら固九条ありり理運り糸之也  
け糸之を溜汁り九条ありり勅勘り身りり上  
未及大長りり昇りり再任りり代りり例りり  
人志勿漏りり

一就り飲示り織内辭退り然り他竹内殿申るり  
りり自り家門御候合り方り御り由り大り辭退り  
糸心内候支りり変り然りりり難無也り世り  
事しり魔波旬り前りり標りり能退りりり  
一每武事告文使糸向りり去十七日坂寺り  
孝上流り由難波りり來りり方り糸をりり合  
りり起難波りり入清軍りり糸向りり由女房り文自

難波方以方へ送て所存の如く及る代に此事  
難波上洛之則来り乃自是死にせし毎なるに殊  
自無福と云ふ事乃云南曹云及て守りおけ方堅  
戸付心中と起りけしと云南曹より罷退し今又  
理運と忝向りて此作他人と云家礼より向退し  
家礼より向て存知と申し一降と君化の儀代  
中諸矣と他より存る事起云と曲に朝家存終  
く亦家礼と益く申連く存事乃事と云  
之然存く自然の如く細申入  
一自ぬ武峯寺門領押坊より云ぬ換難波申之  
然勅使に押留し由今廿三日と評議出候事乃  
南曹已罷退申上云返考て寺門事は寺門領人  
より申し由難波し之致遠礼と申降し而勢  
時分又押坊より云ぬ南曹より申て換高所宗  
一云より云方乃罷り

右条之内にて均々之と云  
又月廿三日  
大納言僧都の房  
頃ぬ武峯寺より申し勅使より向事は尚  
寺而押留し条之及て信蓮し交り領納  
之儀云悦と申然事自及て内、致斗略沖  
下向之条より勅之と申風定し事、實、亦、不、給

南曹已罷退申上云返考て寺門事は寺門領人  
より申し由難波し之致遠礼と申降し而勢  
時分又押坊より云ぬ南曹より申て換高所宗  
一云より云方乃罷り

以下向事。傳蜀部一丸右二五以治定。而然已前  
率尔早下向。儀堅可作。為尸必。方一。武。表。与  
以。許。客。之。之。力。勳。評。定。之。及。以。叔。氏。亦。嚴。密。所。治  
中。海。与。評。儀。也。之。檢。計。之。

五月廿三日

借目代魚海

宿院別當取

五乳之然心持力状宛目代在下

廿三日<sup>泰</sup>夜下常弘百。武。表。子。報。掌。来

月。以。使。一。素。向。之。由。作。之。以。事。依。常。弘。與。尸。也  
又。亦。便。宜。而。孟。敵。錫。取。下。之。以。孟。於。雜。掌。乞。又  
不。之。然。之。也。又。之。之。上。洛。之。礼。三。百。是。中。以。分。百。是。再  
使。亦。立。料。子。五。百。是。常。弘。預。之。於。清。礼。分。者。子。

二至斗七一事。以上常弘取切也

廿四日。自。夜。下。力。常。弘。涉。使。常。女。房。文。来。宣。秀  
多。武。表。子。系。向。子。必。一。存。知。之。由。也。崇。申。而。存。尸  
故障

廿五日。日。以。使。別。康。常。弘。取。人。来。尸。故。障。之。向。前  
廿九日。自。大。乘。院。取。以。使。中。殿。自。南。部。上。洛。多。武。表  
泰。向。子。家。礼。取。子。之。故。申。之。系。之。故。之。故。然  
以。只。入。移。尸。而。存。入。取。又。来

或。日。子。且。大。乘。院。涉。使。再。取。下。以。使。別。康。相  
伴。来。移。之。卷。初。以。上。之。志。先。申。領。状。

又真福寺尸万有子ありて之作を由り  
若文使系向事自奥福寺之作並し由及大  
清し之方ありてありて落居し之御依地左右  
之系向し也之也

六月廿一日

多武峯寺檢校三總中

若文使系向事自奥福寺堅支申ありて落  
居し一途之御之左右以後日決ありて之  
治定し乃來八日延引し之也

六月二日

多武

多武峯寺檢校三總中

多武峯寺勅使沖泰向事延引三系  
之依ありて左右治定一目出皮峯寺之依  
在年之為社一圓之社領之下取及力不  
理也押妨狼藉越常篇之仍皮破裂象亦  
不之之子細併依山傍不意仍之藤門一社  
之御乃為奇敵射之雅意當社之由宗  
之知時之射為寺毎之及懇勤之由狀惟志  
冥之御之慈為寺之祈報由志助之由用白  
佛初禱不可之由就中峯寺之候毎之背  
舊例之子細之由南曹沖禱退之候且之由社

候不詮 勅使率命御来向候不<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>以  
治定之由御与群儀也之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>

又月晦日

真福寺学俗元木

文内以<sub>レ</sub>

多武事寺山傍木構私之<sub>レ</sub>軍忠南初与社儀  
押妨礼入お徳庄責取去貞之<sub>レ</sub>衆云汝逆勅之<sub>レ</sub>  
以<sub>レ</sub>牙、御与及教度院<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>考<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>川<sub>レ</sub>物<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>依  
今方大織冠以<sub>レ</sub>破<sub>レ</sub>裂<sub>レ</sub> 勅使<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>来<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>衆  
列为<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>門<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>押<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>皮<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>莫<sub>レ</sub>汝<sub>レ</sub>衆  
滑お南初<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>志<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>縁<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>操<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>初<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>  
恒与<sub>レ</sub>社<sub>レ</sub>領<sub>レ</sub>遠<sub>レ</sub>礼<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>为<sub>レ</sub>旨<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>送<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>尚<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>乃

各差下<sub>レ</sub>換<sub>レ</sub>校<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>処<sub>レ</sub>一向<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>  
沙<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>曲<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>詮<sub>レ</sub> 勅<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>志<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>押  
爲<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>为<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>物<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>  
彼<sub>レ</sub>寺<sub>レ</sub>就<sub>レ</sub>内<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>降<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>細<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>容  
物<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>南<sub>レ</sub>曹<sub>レ</sub>色<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>左<sub>レ</sub>右<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>力<sub>レ</sub>但<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>評  
御<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>八<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>蜂<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>前<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>放<sub>レ</sub>氏<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>換<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>  
能<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>旨<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>乃  
中<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>

一難<sub>レ</sub>波<sub>レ</sub>倫<sub>レ</sub>前<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>武<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>横<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>沙<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>由  
之<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>汝<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>潤<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>色<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>性<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>  
お<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>院<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>処<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>沙<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>段<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>結<sub>レ</sub>構<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>

即入右門詔及嚴密之評御系之不足處云  
沙清亦注在御系旨字俗評詔之云云

五月晦日

供目代道海

抽取本民戸口法格以房

以狀今日三月然下院雜之

勅使泰旨押苗事自奥福寺宣召女中子細見  
皮狀二通いん力事実者太心之御當時法圓武士押  
妨歎思食之処古家傍中女中系以事之殊依  
此事 勅使至之之御子之落告之御奥福寺一丸  
右以後日此事之有以治定之皮寺回答子之在何性  
及之之計切之自之方五戸合落告之一途之真  
福寺之出状之御子之其後系向之之定日

次之由之作也之之

六月三日

宣秀

奥武家檢校三總以中

就 勅使御系向之候雜掌上洛之延清書友  
之立戸之由候及下之作也既日限亦事治定之  
上志能之之有以御系出御約御以速斗来旨  
之有京着 就中候奥福寺祈詔之先及南都  
領事返之戸中女中水返之令申之然上者依  
何事之有及以泰向之儀之及押苗之ハ男以不均之  
之之由之之御沙

六月四日

法平豪賢



在上中沔門有寺

此寺中六月五日午刻 京若  
自付方丈三月下院雜之上也

六月六日自武家遠人吏本上洛與福寺所  
未落吾之乃一向及用之乃返也

開白而新禱卷教一命進上以新心之致精微也  
後与之子群湖之之燈傳也

五月廿七日 供目代益海

宿院目代敷

大法師守私可為春日社安居吾師之由  
可之下知新志長者宣如付志之淨狀

的應七年五月八日元中并宣秀  
沙上興福寺別當僧正沔房

右長者宣興福寺別當奉狀在之乃安居師大法師曉之去二月廿五日依常道  
か死去云、安居中退か倒立と云云、度云、

就寺門領之儀後南都新訟之抄紙に和副先友ら作  
初起抄披露之處熱別吾相是南都領事迦言し由

内之乎以後曾以吾改持之儀外山之庄より押當由  
免南中比別被記の之紛落吾におよ今志南与願

吾垂し余比通南都在り然之領事傳文より吾より  
尸比改一吾迦し已後付方更以吾願余比上志傳抄り

志之友之志快由物上志對以非魚非道しに相支り吾  
勿御而詮付類力之に如り成役り也

大織冠の非比平愈之由調法下力在悦也其致海  
之燈抄之

七月六日

檢校三總木

以狀内述ノ字不重  
以狀七日寺傍有甚切  
指上正文寺門

在正中門内

以狀委細之披露之其及一向云寺之方云云元  
思念之処委細らし趣り收結之寺門依之作遣  
以中云云力一定之七 勅使より之作打申也之  
計

七月七日

宣秀

多武峯檢校三總木

尚古領より自多武峯如計申以事案之  
清文一紙より之二紙依り右右後 勅使より之  
之沙清以の瓦下惣ふり之形務あり落着之形

妙く由之作下し方南曹弁取而也之執事也

七月十日 右之清尉秀重

供目代以房

去廿日同廿三日取交之寺門群儀状ら執事  
以清文事一途落着以後重あり之ありは  
自四月六日殿下り不例下之云門本儀し殊  
交り之憂惣奇矣非云云恐怖おて下惣  
以形務云之候あり之合之一月出之由同儀  
之あり沙清之方之作下之之計

七月廿四日 秀重

柳為木

民戸

法橋以房

真福寺住持落居之由八月廿二日南都使有状再叙

武常使有状亦相伴来

九月七日六日下十日武常告文使宣秀朝臣参白

之細在別帖

被長者宣備權律師訓英可為去  
應永廿一年分維摩舍講師之由宜  
遣作者長者宣如此志之謹状

明應七年九月十日在申并宣秀

沙上興福寺別當僧正房

被長者宣備維摩會專寺課題宣  
令勤仕給者長者宣如此志之謹状

明應七年九月十日在申并宣秀

沙上興福寺別當僧正房

被長者宣備大法師聰深可賜去

應永廿一年分維摩舍研学暨義德之

由宣卷作者長者宣如此志之謹状

明應七年九月十日在申并宣秀

沙上興福寺別當僧正房

被長者宣備大法師盛因可賜去

應永廿一年分維摩舍大安寺分暨義德之

由宣卷作者長者宣如此志之謹状

明應七年九月十日在申并宣秀

詳上真福寺別當僧正の房

被長者宣備大法師光盛可賜去應永  
其一年分維摩會法隆寺分豎義法之由宜  
書作志 長者宣此付志之 傳事狀

の應七年九月十日壬申年宣秀

係上真福寺別當僧正の房以上二通ハ簡定

以上又通自志勢有奉狀陰紙書之

殿下由領宿院七夕代友職更ら作付院雜之廳  
先代官松陽院及世礼云の更実者大心不二  
然子但以下知難之執勢之由二加下知之旨  
南曹并取而之也の執事也

十月七日右書來尉秀生

供目代の房

殿下由領宿院七各の松陽院に隱下知に執  
押妨云の外次来し後松陽院事志の越智方に  
岸田下代友自去の年押の執を人の後領更の旨  
以職改し時に代官又尚の職のと退と交友致競延  
以下知と吾理に押妨の罪科難遁人殊の越智方  
以下知と支申の充の旨を宣ら加下知の形に致承  
以志を以の旨を及一紙の成敗の由に作出すの旨  
執事也

十月十三日右書清尉秀生

供目代出房

去年二条の御心遣は作を延遠少くは後緩志に  
の岸田堅之戸付の由戸入の後に致一粒の沙汰去年五月に後二条  
大法師榮清東大寺戒和上より官牒未到の旨且  
てと存知の由一と下知後者

長者宣出代出之御状

の在七年十月廿五日九中并宣秀

沙上興福寺別当僧正出房

東大寺戒壇院戒和上より大法師榮清相  
理運し及之宣下より横戸沙汰の目出の由

十月廿三日

宣秀

南曹弁殿

上之寺解ふと素く多始に難常  
玉申之と寺勢奉く由作之返  
寺一抽苗本法格傳を

殿下渡領和列宿院七名代友藏事之末殿藏時  
為越智教官岸田下代友松陽院執事等事去年六月  
より七月に由緒今より及競を押妨の方面より下知の如く  
不申之由  
以介次才の如く去後より由之ら加り下知の由より作の如く  
沙

十月廿八日

宣秀

真福寺別当僧正出房

成身院殿

表竹寺出之由 秀重

難波備前寺常弘寺門廻回事の如く口入の如く宣秀

引し糸少使事し、又武家位以落奉止罪息云殊  
題目之来月維摩会有官而後、其以前之免  
許之之由、其方故之極し乃お京部歎し宿免之  
二為此悦喜之由、南曹并及所也、此批在如史

後十月十日 右京邊門尉秀全

供目代口房

廿七日表日祭来月十日治定之有延引去其  
之注をし由作書し、又惣友の中、亦出如例又  
姓者支糸向し、降当誕生月不之若之、注し  
由作書し

被長者宣備權少僧都兼继可為去應永

廿一年分維摩會他寺探題之由、宜遣作者

長者宣如付忠之傳狀

内應七年十一月三日 左中弁宣秀

汗上 眞福寺別當僧正口房

右他寺探題之由、先寺有寺勢奉之、又云奉並继狀許也  
其寺勢之口房及去之、其為中弁し、云餘日之由、先寺二通し、由副狀し

表日祭神了方公人、口状め、其子細見状し、ん可  
及祭礼之遠執、望之加下知、由可令下知、口  
之由被作、口也、其傳謹言

十一月五日

宣秀

眞福寺別當僧正御房

春日祭、度為右京大夫依苗、小野通、所役人、亦

及此執事之方可為次支于由被作か通務事  
雖以傳奏雖之作か猶為社家可申右京吏之  
系可之作考之謹謹言

十一月六日

賢房

中水口殿

當社祭礼事以奉行少狀如付し為社家技方候  
及神新之可然ん於武度之少下知不事在是  
力次支于於其前之之作考之由之作下也執連  
如文

十一月六日右若衆尉秀重

謹上 春日社友惣安少申

右是以後狀不書之次支于廿三日又延引

十一月 若宮祭礼田示以人定寬律師

号奉行房

權少僧都口宣斗以供目代抄帛雜掌袖苗木

申之例年之候ハ律師斗為衆中執尸之候

之候列候之由尸之

多武峯寺衆徒等謹言上

柝去九月十二日戌冠大織冠大明神御面破

裂事當月廿一日亥冠神拜上畢右御耳

上筋豎一寸廣一分同下豎八分御破

裂衣之任先例御占形之儀可令奏圖給衆

徒亦誠恐誠惶謹言

明應七

十一月廿一日

多武峯寺衆徒亦

進上中御門后

持校法平副狀再擲代五十九是  
另未後代了次分也ふに后下

右狀以久し度下則返給在陰陽頭

多武峯大明神の面々破裂衣事注進如付占

形ありてら注申之由ら作り也之惶謹言

十一月廿三日

立秀

陰陽以反

殿下作如例可均其意之りて一り後し

也

怪異吉凶

去九月十二日戌時大織冠大明神御面右御耳上前  
豎一寸横一分日下豎八分令破裂給事

白去九月十二日己時加戌太一臨戌為用將玄武

中微明六合終切曹天空御行年勝先大陰卦遇

玄胎四牝

推之恠所依神事穢氣不淨不信所致

之上可慎御御病事并恠所口舌火災

等之事歟仍從巽坤方可奏共草哉

期恠日以後廿五日之内来年四月十

月節中庚辛日也兼被

祈請者無其咎畢

明應七年十月廿四日陰陽頭安倍朝臣有宗

神躰御破裂衣事注進之敬言思食の占取如



此より致祈謝し精誠殊又告文使事  
年内あり可ら申沙汰し由ら作り也恐惶  
謹言

十一月廿四日

多武峯檢校三總中

由樽代五十足為来し中り多破裂事  
壬午連續心介事し寺家一段可有慎  
謹候人并秀法橋更ふら仰し神慮  
若け事し人休しう加評定於非方ら  
由圖しそ可然て哉

十一月廿四日使立家を下朝臣也宣秀依維摩會泰向移了  
日月串柿木代八十足為来し五十足ハ下殿下

去十二月十五日御綸旨頂戴由枕拵搦寺鎮  
口三分一可寄附之由満山不可令存知旨之然様  
可令奏申給衆徒亦誠之誠惶謹言

三月五日

多武峯寺衆徒亦

清文

進上 中御門殿

去正月二日 戊尅御陵山御鳴動し任先規御占  
形亦之儀可然之様之預御披露し恐惶謹言

三月五日檢校三總亦

進上中御門殿

七日使上洛

多武峯山陵山鳴動更与解此計し占形之ら  
由其沙汰也恐惶謹言

三月八日

五秀

陰陽以成

橋寺領事不可有相遠之由二九初申一以積  
之又三分一乃附之由申一入象一事五極  
右以不之然根本之寺領之更事附事新樣以法  
實初之靈地於子之忽荒廢云非之冥通歎  
思食之此分之之奏之由嚴密之伴下也  
恐惶謹言

三月八日

五秀

武峯檢校三總之中

佐異吉凶

去正月二日戌刻多武峯寺  
御陵山鳴動之度

占去正月二日之戌時加戌 薇明臨戌為用將大  
裳中神后玄武格大吉大陰 御行年切曹玄武

卦遇乱首重審

推之佐所依裨更穢氣不淨不信所致之上  
可慎御 御病事并口舌欬仍從離坤方  
可有共草盜賊之事哉期佐日以後廿五日之  
丙及九月十月節中戊巳日也兼被祈請者無  
其咎乎

明應八年三月八日陰陽頭有宗

明應九年

去年分 歲末加例之物代半足 加私 為來了不令被

露の可均其意、恐惶謹言

四月五日

多武峯檢校三總々中

大織冠大明神壇上之松從去年、比由、  
枯々若者古木之故、軟如何様変々哉、古形、  
儀々付具以勘又亦給々志、乃為衆悦、由候  
恐惶謹言

五月九日 法平久筆

進上中御門殿

多武峯寺、存如、付、下、形、内、く、り、ら

進、く、由、し、也、恐惶謹言

五月十日

陰陽以友

恠異吉凶

今月十日未冠社恠到來多武峯寺  
大織冠大明神壇上之松從去年連々  
枯候变

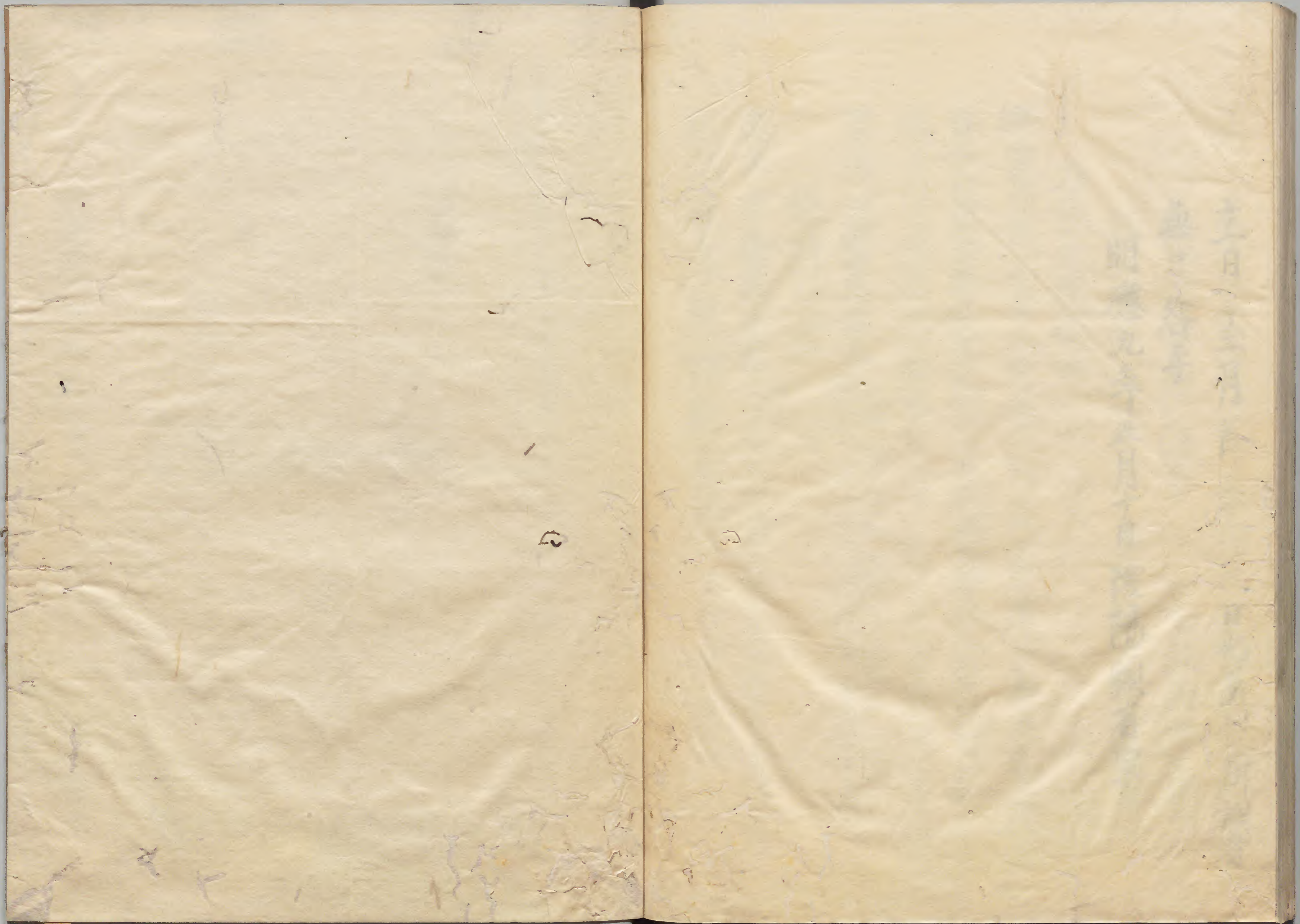
占今月十日癸亥時加未大吉臨矣為用將向陣中河  
魁白席終小吉大陰御行年寅上切曹六合卦遇  
伏吟五憤四敬

推之恠所依神事、遠例穢氣不淨所致、  
上可慎御御病事、并、口舌、欵、仍、從、震、艮、方、  
奏、其、草、事、哉、期、恠、日、以、後、廿、五、日、之、内、及、来

十一月十二日節中戊己日也兼被祈謝者  
無其咎乎

明應九年五月十日陰陽頭有宗

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 御、祈、謝、等]*



立日  
並  
記

